

原爆文学研究会報

第三八号

原爆文学研究会 二〇一二年六月

福島雑記——大江健三郎を改めて読み直して

大きい、徹底した、静けさでした。ひとつは水平にいたただきを切った円筒形、後のふたつは山型の、作動中と建設中の原子炉格納施設と——私には教会の礼拝堂の建物の裏返し、とそれらが感じられたのです——、その向こうの風いだ海、全体を包む穏やかに眩しい空。／私はその静けさに、行進の参加者みんなが集中したための無音状態より以上のもの——つまりゼロ・プラス・アルファ——を感じていたとも思います。

大江健三郎の『燃えあがる緑の木 第三部』の右の場面では、「救い主」と呼ばれる作中人物「ギー兄さん」を中心とする「燃えあがる緑の木の教会」メンバーが、原発に向かつて行進を行う。また別の場面では、原発を「怪物的なほど大きい規模の、神に向けられた侮蔑」と規定し、それに「与すまい」という述べるジョージ・ケナン『核の迷妄』の一節を、「ギー兄さん」が、教会の祈りの文言として採用する。行進によって何かを訴えるのではなく原発への行進自体を目的化し、原発を「礼拝堂の建物の裏返し」たる「神に向けられた侮蔑」と捉えるこれらの箇所には、冷戦体制解体後の一九九〇年代における大江の核認識が色濃く刻まれていよう。仙台で地震に遭遇した私は、その時、原発への不安など微塵も頭になかった。アメリカにいるある研究者が、東北での大地震のニュースを聴いて真つ先に女川原発のことを想起したと語るのを聴き、私は自らの核意識の欠如を思い知らされた。同時にこの小説が、私にとって以前とは異なる相貌を呈して立ち現れてきた。

この小説が出版された平成七年三月から十七年後の今年三月、「救い主」ならぬ大江健三郎本人が、「原発いらぬ！ 3・11福島県民大集会」の先頭に立った。脱原発運動に携わる大江の発言は、六〇年代と変わらず深瀬基寛訳のオーデンの詩句に拠っている。「われらの狂気を生き延びる『outgrow our madness』』とついで一節の典拠であるオーデンの詩に、大

江は渡辺一夫から引き継いだ「ユマニスム」の探求というモチーフを接続させる。依然として核時代である二〇一〇年代においても、大江のユマニスムを模索する文学的（そして政治的）営為は続けられるに違いない。縁あつて今年四月より私は福島市に移り、「礼拝堂の建物の裏返し」なる物と五〇キロの隣り合わせで暮らすことになった。事故による原発停止という徹底した静けさの「ゼロ」の後に、日本および私は、生活と思考においてどのような「プラス・アルファ」を感じるようになるか——私の言葉は「祈り」にも「発話」にもならない雑念のままである。が、『燃えあがる緑の木』を読み直し、福島で送るこれからの日々、この小説全体を縁取る詩句《『Rajaei』を添えたいと思った。（高橋由貴）

第三八回 原爆文学研究会報告



二〇一二年三月一七日（土）、福岡大学セミナーハウスで開催した第三八回研究会には約二〇名が参加。石川氏の発表に対しては「プレスコードに触れるか否かという二項対立を超える必要がある」という点は納得できるが、カストリ雑誌に注目しても別の二項対立が生まれるのではないかと等々の質疑があり、東村氏の発表に対しては「証言」という言葉がどのように使われ出したのかを帰納法的に問うことと、今、「証言」という言葉を使って何かを問うことの意味との接合点を探る必要があるのではないかと等々の質疑がありました。

占領下の原爆言説

——カストリ雑誌は何を伝えたか

石川 巧

本発表は、プレスコード下で発行されたカストリ雑誌およびその周辺にあった総合雑誌、娯楽雑誌、婦人雑誌を射程とし、原爆をめぐる言説がどのように報道され、どのような誌面構成がなされていたかを検証したものである。

占領下の原爆言説は、言論の抑圧／回避、書かれた言葉（表）／書けなかった言葉（裏）という二項対立の図式に回収されることが多い。だが、プレスコードを主語として分析するだけでは、敗戦後の日本人が原爆に対してどのような認識、イメージをもち、広島・長崎の被爆／被曝をどのように受け止めていたのかが明らかにならない。非当事者の認識に迫るためには、いったんプレスコードをめぐる議論の外側に逸脱する試みが必要になる。そこで、本発表では、①〈占領下の原爆言説〉の語られ方 ②カストリ雑誌とは何か？ ③占領下の原爆言説に関する〈表〉と〈裏〉の論理 ④敗戦直後の原爆言説 ⑤広報装置／被実験者としての永井隆 ⑥ジャーナリズムの視線 ⑦証言の記録 ⑧ゴシップ／笑い／エロス ⑨フィクションの言説 ⑩雑誌「生態」（創刊号）の特集「原爆とSex（性）」 ⑪雑誌「婦人公論」にみる原爆関連言説という項目を立て、発表者が所有する諸雑誌（注）を網羅的に読むことで、これまであまり言及されることがなかった角度から占領下の原爆言説を分析することを試みた。

中川正美が「原爆報道と検閲」（20世紀メディア研究所編「Intelligence」平成15年10月）で指摘するように、占領下の検閲においては、占領批判、共産主義思想や組合運動、天皇制をめぐる議論などに比して、原爆に関する規制がそれほど厳しくなかった。にもかかわらず、日本の言論界は殊に生き残った被爆者／被曝者という観点から言説を組み立てることを忌避し、その存在を黙殺しようとした。

一方、当時厳しい核開発競争を展開していたソ連を牽制するかのよう
に、原爆の破壊力、衝撃力を科学的に説明することに対しては、むしろ
積極的に記事化され、「廃墟」、「消滅」といった表現を用いることで、
すべては一瞬にして吹き飛び、あとには何も残らなかったと語る手法が
蔓延する。ここでの原爆は、科学の〈神〉が地上にもたらした人道的な
殺戮兵器として機能し、結果的に、生き残った人々の存在性を政治的戦
略の障害物として抹消する働きをするのである。

また、同時代の原爆言説をみていくと、抑圧される主体としてのアイ
デンティティを愛撫する日本と、原爆の威力を誇示し、その圧倒的な科
学技術力をもって世界を制圧しようとするアメリカの思惑が奇妙に一致
する地点が見えてくる。原爆を超越的な力（＝人類全体の脅威）と位置
づけることで世界をひとつにまとめあげ、恒久平和につなげようとする
論理が急速に幅を利かせることからわかるように、戦後社会を生きる
日本人にとって、原爆および被曝者の存在は直視したくない現実であり、
ある意味では、プレスコードの規制に便乗することが積極的に求められ
ていたようにも思えるのである。

注 分析対象をカストリ雑誌とその周辺とした理由は、①アメリカおよび占領
軍への「不信」や「怨恨」を招来するような言説に対して厳しい検閲がなさ
れるとともに、マス・メディアにおける自主規制が広がりつつあった時代に
おいて、発禁処分を懼れることなく雑誌刊行できたこと（発禁を宣伝文句に
した「猟奇」の例からも分かるように、カストリ雑誌の場合は、発禁がむし
ろ勲章であり、必要に応じて誌名を替えて発行を継続することもできた）。
②ヤミで流通していた仙花紙を使用したものが多く、紙配給の権限を利用し
た言論統制から逃れたところで諷刺的・挑発的な記事を掲載することができ
たこと。——以上による。現在、日本でまとまった分量のカストリ雑誌を所
蔵するのは、国立国会図書館のプランゲ文庫資料、同志社大学、早稲田大学、
大阪芸術大学などが、国会図書館以外は部外者に対して非公開になっている
場合が多く、閲覧することができない。したがって、今回は発表者が所有
する占領下の刊行雑誌、約一二〇〇冊を対象とした。

「生活記録」から「証言」へ

——「長崎の証言の会」刊行委員会創設期とその周辺

東村 岳史

成田龍一『戦争経験』の戦後史』が整理しているように、被爆者の手記や談話が「証言」として前景化されるのは主として1970年前後からであると私は考えている。報告では、「証言」活動の中で主導的役割を果たしてきた「長崎の証言の会」、とりわけ鎌田定夫氏に注目して運動初期の動向を考察した。鎌田氏に着目したのは、彼が「証言」運動を立ち上げる前に関与していた生活記録運動との連続性／非連続性に興味をひかれたこと、また非被爆者として被爆者とのような関係を結んだのが重要だと考えたためである。ごくかいつまんで述べれば、前者については、生活記録運動に寄せられた「実感べったり主義」といった批判を克服するために「証言」という強い意味を持つ言葉が選ばれたこと、後者については、「精神的被爆」によつて「自己の思想的核」を形成し被爆者たちと合流する、といった主張を行なっていたことを報告した。ほぼ同時期（1970年前後）被爆者を撮影していた写真家集団の「証言」運動と比較すると、被爆者自身を運動主体として形成していく生活記録運動型の「証言」運動の方が多くの人々を動員し、継続されていくことになる。社会運動論的にいえば、「証言」は「たたかいのフレームミング」として機能したのである。そして運動の方向性は、被爆体験の継承・思想化という課題として広く認識されるようにもなった。しかしながら、非被爆者である鎌田氏がなぜ運動に深くコミットするようになったのか、「証言」から被爆体験を思想化することはどのよう

にして可能なのか、という点については、報告者自身もまだ納得していない。そのせいもあつて、質問やコメントはこの点に集中した。『思想化など「妄想」ではないか』、というコメントもいただいた（この場合「妄想」は必ずしも悪い意味だけではないと補足されたが）。このようなコメントを受けると、「鎌田氏の業績は長崎以外ではほとんど知られていないのではないか」という別の方の感想は当たっているのかもしれないとも思う。ただ、それよりは、私の報告が鎌田氏の活動を知っている人にはそれなりに伝わるかもしれないが、そうでない人には伝わらない内容だったことが原因であるのは否めない。

私の未熟さから説得力不足の報告に終わってしまったものの、鎌田氏を中心とした「証言」運動の意義を考える重要性は依然として減じていないと私は思っている。原爆・被爆を語る言葉がステレオタイプと化して行き詰まってしまうことが少なくない中で、「証言」はどう位置づけられるのか。「証言」の歴史性や強度を他の運動や媒体と照らし合わせながら今後も考えていきたい。

彙報

第三八回 原爆文学研究会

【一日目】

○日時 二〇一二年三月一七日(土) 一四時より

○会場 福岡大学セミナーハウスセミナー室D

○研究発表

占領下の原爆言説——カストリ雑誌は何を伝えたか

石川 巧

「生活記録」から「証言」へ

——「長崎の証言」刊行委員会創設期とその周辺

東村 岳史

機関誌 「原爆文学研究」 第一一号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第一一号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一二年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 千八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

編集後記

会報では毎回、直前に開催した研究会の発表の要旨とともに、ごく短いリード文の中で研究会当日に参加者から出された質疑について報告していますが、もちろん研究会当日にはとても紹介しきれない数の質疑応答が交わられています。会報の限られたスペースにおいてどのような質疑を紹介するのか、毎回頭を悩ませるところです。石川氏のご発表は、カストリ雑誌というマイナーな媒体に注目することによって、「原爆表象を抑圧する占領軍とそれを公表しようとする表現者」という二項対立の枠組みからは見えない問題を探るというものでしたが、発表に続く質疑応答でも規制が比較的ゆるやかであるはずのカストリ雑誌で原爆表象があまり見られないことの意味をどのように考えるのか、ということが中心的話題になりました。東村氏は鎌田定夫氏が中心になった証言の会の活動に注目し、そのありようを具体的に検証したものでしたが、発表に続く質疑応答では鎌田氏が提示した〈精神的被爆〉や〈被爆体験の思想化〉という戦略の有効性が中心的な話題になりました。いずれも示唆に富む発表と質疑応答でしたので、ぜひ機関誌などでこの成果を発表していただきたいと思っております。

九州を中心に年四回の研究会を開催してきた本研究会も、近年の会員の増加とお住まいの広域化にともなって、従来の形式を見なおす必要が出てきました。開催を年三回にして、代わりにそのうち一回を二日間、九州以外の場所で開催する、という運営の仕方が適切だろうという判断のもと、次回は七月七・八日、広島で開催することにいたしました。よろしくご参加下さい。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

千八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>